

資料涉猟余話

その92

香取秀真かとりひまふま（秀治郎） 洋戦争直前の昭和十

・一八七四〜一九五六年、春秋両度天龍
四）は、鑄金家・歌 峽に来遊した。その
人として名高い。明 時の様子が、香取の
治七年千葉真に生ま 第二歌集『還曆以後』
れ、東京美術学校卒 （科野雜誌社・昭和二
業後、同校教授・帝 十三年刊）に詳しい
室技芸員・芸術院会 員を歴任し、鑄金界
並びに工芸界の重鎮 となった。昭和二十
八年、文化勲章受 章。また、若くして
正岡子規の門に入 り、アララギ派の歌
人として知られた。
その香取が、太平

見に仙寿楼へ、夕 近く天龍峽仙峽閣 着。数人同宿。

別れ、浜本助千代 君と共に吉田に出 づ。弁当酒を添へ

取の詠歌である。前 年に来泊した川合玉 堂を意識してこう詠 んでいる。

舟をうかべて岸壁 を賞す。この日午 前、人々飯田へ。

ひそかに感謝す。 文中の北原大輔

また、龍角峰を眼 前にしてこうも詠ん だ。

一枚の写真から ③

香取秀真の天龍峽来遊

鎌倉 貞男

夜、仙峽閣主人原 貞造氏の為に色紙 短冊数葉をかく。

それから約半年 後、香取は再び天龍 峽を訪れた。その様 子も右歌集に詳しい ので、本人の文章か ら引用する。

四月二十日、北 原大輔氏のすすめ によりて天龍峽 へ、この朝、辰野 駅前みのわ屋に同 氏一行を待ち合わ せて電車にて飯田 へ、伊原家入札下

出身の陶芸研究家で ある。文部省文化財 委員を歴任し、陶磁 器の鑑定・収集家と して知られた。香取 の友人であった。次 は、その時の香

蓬萊の山のごとく に峙てる巖にはひ 松躑躅岩松葉 * 雲もなくよく晴た った。夕五時半仙峽 閣着。陽は全く暮 れたり。夜、冷え冷 えとしてねむられ ず。八日朝の日影 見えたれど後曇。



香取秀真（左から6人目）一行、左右に北原大輔（前）、三佳（後）

十一月七日、仙 峽閣に霜葉を見べ く出で立つ。朝八 時半新宿へ、北原 大輔君と同行。浜 本君あとより会す。 この日空一ひらの

雲もなくよく晴た った。夕五時半仙峽 閣着。陽は全く暮 れたり。夜、冷え冷 えとしてねむられ ず。八日朝の日影 見えたれど後曇。

また、この時は、

（故人敬称略）

十一時半頃朝食 後、公園に紅葉少 しあるを見に行く。 仙峽閣の前面は楢 葉あるのみ。流れ はすみで藍のごと し。終日寒し、炬 燵をつくらしむ、 湯たんぽを入れて ねる。せき出づ。

写真はこの時のも のであらう。曇天の 寒い日だったよう で、皆外套を羽織っ ている。文章には特 別の記載は無いが、 写真から香取を始め それぞれ夫人同伴だ ったことがわかる。

日本はこの一月 後、太平洋戦争に突 入していくのである が、果たして一行は 何を思い、何を感じ ていたのだろうか。

先の北原大輔の弟 で、飯田市出身の鑄 金工芸家北原三佳 （一八九五〜一九七 二）も同行したので 一緒に写っている。

なお、秀真と三佳は 師弟である。

また、この時は、